

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 19 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520399

研究課題名(和文) フランス15・16世紀の愚者演劇にみる聖俗超越への志向性を巡る知の歴史的総合研究

研究課題名(英文) Historical Research on the intellect and its intentionality to transcend sacred-profane opposition through French fools theater in 15th -16th century

研究代表者

川那部 和恵 (KAWANABE, Kazue)

東洋大学・法学部・教授

研究者番号：70332765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：中世からルネサンスへの転換期とされるフランスの15世紀後半から16世紀前半は、キリスト教的な聖なる観念が俗との関係において強く規定されるようになり、聖・俗の対立が鮮明化した時代といえる。この間に栄えた愚者演劇は、俗の側からの発現としてこの対立軸の存在を広めることに寄与しているものの、しかし同時にこの対立図式の全体をも視野に入れたその知は、二項間の関係性をめぐる問題に思考を凝らし何らか意見表明へと向かっているように見える。本研究ではそこに聖俗超越への志向性の看取しうることを、その知の表出であるテキスト(身振り、衣装を含む)並びに歴史的文化的な背景と知の体系の総合的な検討を通して考察し導き出した。

研究成果の概要(英文)：During the late 15th century and the early 16th, period of transition between the Middle Ages and the Renaissance in France, the Christian sacred idea, newly in opposition and conflict with the profane, comes to be strongly prescribed with it. Fools theater that flourished during this period contributed to the spread of this conflict describing it in the profane point of view, but at the same time, its intellect activities surveying a whole of this opposition scheme, tried to elaborate new perspective of thinking based on the intentionality to transcend the binomial sacred-profane opposition, which I showed in this study through a comprehensive examination not only of the text (including gesture, costumes) as expression of the intellect, but also its historico-cultural background and the whole intellectual system of the time.

研究分野：フランス15 - 16世紀演劇・文化・思想

キーワード：愚者集団 聖と俗 知の遊戯

1. 研究開始当初の背景

患者演劇の「患者」(Sot)は二重の意味で重要だ。この患者はまず「賢い患者」であること、そしてこの名は登場人物のみならずこの演劇に関わる役者・作者をも指していること、すなわち「患者」とは、逆説的にして多義的な指示内容を含む、曖昧にして包括的な語であり存在だということである。患者演劇をめぐる研究は総じて演劇(文学)史や舞台芸術の視点から、その多様性の各面を個々に切り離して行われてきたが、そうした近代的な分析的研究の結果は、いわばこのジャンルの未熟さの確認に帰着してしまっているといえる。また、この人物を愚か者の類型として民話や大道の道化芝居と関係づけたり、あるいはそのいわゆる道化特有の豊饒な性格に着目して、民衆文化の観点から解釈されることもあった。だがこれらのアプローチには作者の視点が欠けている。確かに殆どのテキストは作者不詳ではあるが、しかし作者に代わる「患者集団」という存在がある。その実体は古今の学知と教養に長けた、批評精神冴えわたる知的若者たちであった。彼らの「患者」を語った演劇活動は、まさに社会が聖と俗の関係性の中で揺らいでいた時代を背景に展開されたのであり、この文脈と密接不可分に関わり合っていたと思われる。いつとき社会現象化した演劇を牽引したといえるその知性は、聖と俗に関し、歴史的、文化的文脈のなかで何を見据えていたのだろうか。

フランスのルネサンス前夜とも言いうるこの時代は、キリスト教的な聖なるものの観念が地滑りのように変化し始めた時代であった。それまでヨーロッパ精神をその根底において無意識のうちに規定していた聖性のあり方は、俗との関係において強く規定されるようになり、一方で俗に対して称揚の対象となり、他方で俗による揶揄の対象となった。そうした文化史的な動向はときの演劇にも投影され、患者演劇は揶揄の側面を担ったと考えられるのであるが、しかし、その道化的人物についていえば、そこには聖を揶揄しつつも称揚するというアンビヴァレントな様相が観察される。このように同一人物に共存する聖と俗のいわば葛藤的關係は、当該人物の弁証法的言説すなわち知の方法のありようとも

照応しており、ここに、道化の仮面の下の作者・役者たる時の知識人の思考と精神の一端を見てとることができる。ここから、当時の聖・俗に対して大きな意識変化が生じた時代において、その中枢で心身ともに聖俗の混淆の中に生きた自称患者の知識人作者の知のあり方という問題性が浮上したのであり、この葛藤のエネルギーがどこに向かおうとしていたのか、その展望の可能性を追究してみたいと思ったのが、本研究課題の動機である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、患者演劇の作者・役者の分身と目される作中の道化的人物の言説に表れた知の形式が、聖と俗との関係性においてどのような展望に向かっているか。それはどのようなビジョンのもとで、いかなる歴史文化的な環境の中で形成され作動し、そして時代の中でいかなる意味と機能を担っていたのかを解明するものである。この場合の作者とは、上演に携わった集団全体を意味する。それは、祝祭の場でのみ患者に変身して、祭りの儀式と娯楽万般をとりしきった祝祭集団である。彼らは日常は法学部の学生とか、高等法院の下級書記であったが、法律・法廷のみならず大学の教養科目(arts libéraux)さらには当時のアカデミズムに伝播していた哲学思想上の多様な議論にも通じていた。当時の知的エリートである彼らが仲間うちで組織したこうした集団には、それ故に、おのずから当時の時代思想を反映する共通理念や精神が貫いていたと思われる。本研究では、そうした知的な存在がその道化の仮面の背後に秘めた思考のさまを聖と俗の枠組から照らし出すことにより、巨大な歴史的転換期にあったフランス中世末の知のパラダイムに新たな理解を提示すること、を目指す。

3. 研究の方法

研究の進め方としては、究極的には作者の思考や精神を見据えて、彼らの分身と目される作中の道化的人物の言説に表れた知の形式が、聖と俗との関係性、とくにその葛藤的關係が結果としてもたらしえた新たな展望とはいかなるものであるかを考察し、その上

で、その知のありようがどのようにして形成され作動したのかを歴史文化的に跡付けて、中世からルネサンスへの文化史的転換期におけるフランスの演劇道化を聖・俗・知の視点のもとに捉え直して愚者演劇の本質に迫る、という方向をとる。

以上の構想に基づき、初年度は、本研究の基盤部分にあたるテキストのコーパス作りに専念した。愚者演劇の名の下に分類されるジャンル（ソティ、滑稽説教）およびこれ以外でも「愚者」と定義しうる人物が登場する作品（ファルス、モラリテ、他）の整理と、広く関連の研究書や論文等も参照しながらの原典の読み直しを行った。

2年目は初年度からの継続としてテキスト分析を続けると同時に、視線をテキストの外にも向け、前年度のテキスト分析でえられた成果を視野に入れつつ、演劇道化の超越志向的な知のありようがどのようにして形成されたのかを、聖と俗の歴史の中に探る。具体的には、神と道化の関係性を歴史的に洗い出すことを目標に、その認識と表現の歴史をたどった。

3年目は、前年度と同様、演劇道化の超越志向的な知のありようがどのようにして形成されたのかを明らかにすべく、まず、人文主義と道化の関係性に焦点を当てて、古代知における道化観がどのような形でこの時代の聖俗の関係性に波及しているのかについて考察した。次に、歴史の中で展開されてきた多様なキリスト論や無神論の内容を分析して、これも同時代の聖俗の関係性にどう波及しているかを位置づけた。さらに、作者たちの置かれていた知的環境について、大学における修学内容はいかなるものであったか、特に、自由七学科のうちで最も重視されたといわれている弁証法の内容や、哲学・神学さらに人文主義的学問にかんする彼らの知識や関心・関与のあり方はどうであったか、を中心に、聖と俗の視点から詳しく調査分析し考

察した。

研究最終年度は、最後の検討事項として、こうした演劇道化の知のありようがなぜとりわけこの時代にさかえたのか、その同時代における意味と機能について、異端や宗教論争の関与の如何や、この知のビジョンにおける社会的・政治的な性格の有無、さらに作者たちの宗教的立場、聖史劇との関係性などを中心に検討した。

4. 研究成果

愚者演劇の知的営為における聖と俗の葛藤が結果としてもたらしうる新たな展望の可能性を、「愚者」の言説の分析と歴史・文化・社会背景の総合的な考証と検討をとおして探った本研究成果の主旨は以下の通りである。

対立関係にあるとされた聖と俗の俗に位置しつつも、包括的な視野をもつこのジャンルの知ゆえに生じている聖と俗の葛藤が、聖俗超越への志向性を孕んでいる可能性のあることは、端的には、言説の逆説的、循環的、批評的性格によって説明することができるだろう。すなわち、テキストや身ぶりや衣装などパフォーマンスの全体に観察されうる、神（聖）へのパラドキシカルな揶揄も、聖と俗の間の循環運動も、根底に貫いている批判的視点も、全ては聖・俗の境界線の攪乱ないしはその対立的図式の無効化に寄与するのであり、その一方、これを主導する主体としての知は、このように聖を客体化・相対化することにより、自らは聖と俗の概念枠組みの外に、上に、離反あるいは超越していくことになっているといえるのである。そしてこの志向性は、古代以来の道化の認識論史の伝統、中世キリスト教をめぐる様々な教義や議論、また古来のパロディ文学の流れと合流することで一つの時代のベクトルと化し、当時の過渡的文化特有のエネルギーを創り出していたと考えられる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

(1) 川那部和恵, フランス15~16世紀の「愚者演劇」における笑いの衣装: その批評性をめぐって, 東洋法学, 第58巻第2号, 2014.12, p.61-73. 査読無

(2) 川那部和恵, La Folie des Gorriers における人物 Folie の形成背景、ロンサール研究 XXVI, 2013.5, p.1-22. 査読有

(3) Kazue KAWANABE, Sur la relation acteur / public dans la notion de “théâtre pauvre” de Jerzy Grotowski, 2011.12, *Revue des Sciences Humaines*, No.304, Lille, France, p.147-153. 査読有

〔学会発表〕(計2件)

(1) 川那部和恵, sottie / farce の衣装考 笑いの舞台装置, 東北大学大学院文学研究科シンポジウム「残るものと消え去るもの 17世紀以前におけるフランス語劇テキストの制作・上演・伝承」, 2014.7.25, 東北大学

(2) 川那部和恵, フランス中世の放浪芸人と演劇、明治大学情報コミュニケーション研究科 2013 年度フォーラム「偉大なる伝達者たち 乞食行脚、遍歴、放浪」, 2013.11.30, 明治大学

〔図書〕(計2件)

(1) 川那部和恵, 放浪、遍歴、乞食行脚 偉大なる伝達者たち, 共著, 創英社/三省堂書店, 2014.3. 担当範囲: フランス中世の放浪芸人ジヨングルールと演劇, p.33-56.

(2) 川那部和恵, ファルスの世界 一五~一六世紀フランスにおける「陽気な組合」の世俗劇, 溪水社, 2011.11, 314p. (2011 年度学術振興会助成.)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川那部 和恵 (KAWANABE Kazue)
東洋大学・法学部・教授
研究者番号: 70332765

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: